



## 四 成長3

---

あたしは中学生になった。これまでは、学校に行くときも、授業中も、下校時も、友だちの家に行くときも、買い物に行くときも、宿題をするときも、お風呂やトイレ、寝室までも、ママが一緒だ。それが当たり前だと思っていたし、それが嫌だとは思わなかった。でも、最近は、いつも一緒にいることがうっとおしくなってきた。わずらわしくなってきた。

「どうして、いつも一緒にいるの？」

あたしはママに直接尋ねた。

「どうしてって？」

ママは予想外の質問だったのか、一瞬、フリーズした。だが、すぐに、上司なのか、ビッグデータで調べたのか、こうした問いへのベストの答えかのように

「それは親子だからよ」と、答えになっていない答えをした。

親子だと言っても、あたしはドローンから生まれたわけではない。もちろん、この年まで、授乳から始まり、おしめの交換、食事の提供、ままごと遊びなど、あたしを育ててくれたことに対しては感謝している。だけど、それらの行為は、ママたち子育てドローンの仕事なのだ。役割なのだ。その仕事をしなくなったり、嫌になれば、子育てドローンは廃棄されてしまう。こういうことを言えば失礼かもしれないが、自分たちの生存のために子どもを育てているだけなのである。愛情もあるかもしれないが、その愛情は、プログラミングされた、与えられたものでしか過ぎないのではないか。

でも、よく考えると、それはあたしたち人間も同じなのだろう。あたしはまだ中学生なので、今すぐに子どもを産むことはないけれども、成人して、産むことになれば、その産んだ子を可愛がるのだろうか。確かに、小さな子どもは可愛い。授業の一環で、あたしも生まれた病院で、生まれたばかりの赤ちゃんをあやしたり、授乳したり、おしめを替えるなど、お世話をしたことがある。ただし、可愛い反面、大変だなあ、一日ならばできるけれど、毎日ではできないなあ、と切実に思った。

それに、この社会では、女性は子どもを産むだけで、子育てはドローンが行う。女性は、健康に問題がないならば、二十代の前半と三十代の前半に、人工授精で子どもを産むことになっている。これは性教育の授業で教わったことだ。

でも、子どもを産むってどういうことなのだろう。産んだ後、その子どもを自分が育てないということはどういうことなのだろう。

情操教育の一環という名で、この街にも動物園が運営されている。この動物園では、カバやキリン、パンダにライオンまで、自分たちで子どもを産み、育てている。今の人間だけが産みっぱなしだ。だけど、魚やカエルなど、ほとんどの生物は卵を産みっぱなしで、ふ化した子どもたちは、外敵に襲われながら、自分たちで成長しなければならない。人間だけがいいとこどりをしているのだろうか。

昔、女性たちは子どもを産んだ後、休暇を取って、子どもが一定の大きさに育つまでは仕事を休んで、養育に専念していたらしい。そして、その休暇が終わった後は、保育所や幼稚園に子どもを預けて仕事に復帰した。その間、どうしても仕事のキャリアが途絶えるし、家に帰れば、子どもたちのために、食事やお風呂、寝かしつけや明日の保育所の準備など、数多くの仕事をこなさ、ようやくそれが終わる頃には、自分もバタンキューで倒れるように眠りに陥り、再び、翌朝が始まることが繰り返されていたそうだ。

配偶者である夫たちの中には、子どものために、保育所への送り迎えや、あやし、寝かしつけなど家事に協力してはくれる人もいたけれど、それは少数だったし、あくまでも補助的な立場であろうとしていた。それが長い間の習慣で当たり前のようになっていた。そのことに疑問をはさむ人たちがいて、男女平等という名のもとに、小さな改革は行われたそうだが、抜本的な改革までには至らなかった。

こうした現状が何世代も続くうちに、ようやく変革の機運が高まった。人類の上層部が人工知能に人類の未来を尋ねると、暴力的で、かつ、先の見えない目の前だけの競争に明け暮れることが好きな、我がままな性である男性の絶対数を必要最小限度に抑制し、女性が大多数を占める社会にした方が、戦争を始め、むやみな競争や、性差による差別もなくなり、また、女性が主に行ってきた家事等をドローンが行うことで、家事の荷重から解放され、女性が本当の能力を発揮できる、そうした社会が望ましいという答えが返ってきた。

この考えは、当初、行き過ぎた考えとして伏せられたものの、社会は一向に改善の見込みが立たなかったことから、人類の上層部は、あえて、この考えを社会に披露した。

当然、当初、男性側からは、それこそ男性へ性差別だ、個の問題を男性全般の問題に広げるのいかなものか、と、自らの存在を否定されたことから大反論が起こった。

しかしながら、過去の人類の歴史を詳細に洗いだすと、原始、女性は太陽であったにも関わらず

、道具という名の武器の発明が増えだすとともに、父系社会へと移り変わり、それに伴い、人類間の争いごととも戦争という形で何度か頂点に達した。

その事実を男性に突き付けていくと、当の男性たちも反論ができなくなっていく。社会では、母系社会への回帰が叫ばれ、その思想に共鳴した女性たちは人工知能の指導も受け、男性の子どもを産まなくなる方法も考えるとともに、また、男性が生まれたとしてもすぐさま処分するという実力行使をすることで、男性の数は大幅な減少していき、女性社会への反対勢力も激減していった。

これが、この社会が女性だけでほとんど生活している理由だ。

あたしも、そう言えば、小学生のころから、女の子ばかりだなあ、と不思議に思っていた。でも、逆に、女性ばかりの社会だと、自分が女性であることも忘れてしまう。また、意識する必要もなくなる。当然、女性同士のカップル、家族も生まれる。それは自然なことだ。もちろん、恋人ももたずに、ドローンと一緒に一生を終える人もいる。それはそれで認められている。

あたしの中学にも、もう既に、学校に行き帰りや授業の休み時間、はてまたトイレにまで一緒に行くカップルもが何組か生まれた。彼女たちは、髪型も服装もお弁当まで同じだ。ママドローンまで同じように見える。いわゆるホモ、同質性だ。小学生の頃の友達とは違う、親密な二人だけの世界がそこにある。その強力なバリアーを張った二人に世界に、他人は近づくことさえ躊躇してしまう。

この前なんか、朝、学校に行き、教室に入ると、翔子と早智子があたしの席の近くで顔を引っ付け合う様にして会話をしていた。あたしは机にカバンを置き、何気なく「おはよう」と声を掛けると、顔をこわばらせた翔子があたしを睨みつけて「一体、あたしと早智子のどちらに挨拶をしたの。あたしの早智子にあたしの承諾もなく、気安く声を掛けないで」と胸倉を掴まれたことがあった。

慌てて、あたしのママと祥子と早智子のママが間に入ってくれたので、喧嘩にならずに事なきを得た。この時以来、こうしたカップルには気をつけている。それに、女性が暴力的ではないとは必ずしも言えないのではないかと、その時は思った。もちろん、個の問題はあるのだろう。とにかく、彼女たちは、既に、大人に向けて出発しているのだろう。

その点、あたしにはその兆候はない。友達には友達としか見えない。それ以上、親密な関係は求めていない。聖子ちゃんも一緒だ。聖子ちゃんはダンスに歌に、お芝居にと細切れの時間の中で生活している。そんな余裕な時間はないのだろう。そして、あたしはこの社会に違和感がある。この社会の中で生きていながらも、どこか冷静に、客観的に見つめている。そんなあたしは友人

とはベタベタな関係は築けない。

そんなあたしでも嫌でも女であることを意識する時がある。毎月一回やってくるアレだ。

初めての時は、知識はあったけれど、驚いた。ママは情報を持っていたけれど、自らが体験はしていないので、相談してもどこか上滑りのような答えだった。

こういう時は、やはり、人間のママの方がよかったと思う。今でも、アノ日になると、血が流れていくのがわかる。あたしから排出される血。初めての時は、このまま死んでしまうんじゃないかと思ったぐらいだ。効率性というのならば、あたしはまだ子どもを産みもしないのに、毎月のアレがあることがわからない。無駄の極致ではないか。そう、生産的ではない。

あたしが流す血は、あたしが摂取したお米やパン、肉、野菜などの栄養分から製造されているのだろう。今、あたしは中学生。二十歳を過ぎれば、子どもを産むらしい。その次は三十歳を過ぎて。その子どもを産む期間だけ血を流せばいいのではないか。その方が効率的・効果的だとは思う。女性が流す血を集めれば、それこそ、太平洋ならぬ、血の海ができるのではないか。その血は、生命を生み出せなかった悲しみで包まれているのではないか。冗談かもしれないが、その血を、水がなく、生物が現存しない星に放出すれば、新たな生命体が生まれるんじゃないだろうか。

だけど、よく考えれば、それだけ子どもを産むことは、人類という種の維持にとっても重要で、そのためには、子どもを産む準備として、毎月のアレがあり、そのために多くの血を流す必要があるのかもしれない。つまり、アレは神に捧げる生贄なのかもしれない。血を流す無駄こそが、無駄の中にこそ、生命の神秘が隠れているのだろうか。やはり、世の中に非生産的なものはないということか。それにしても、男の人って、どんな人？ホモではなく、ヘテロが気になるあたしは変なのか。

奈保子があたしを避けている。これまで、朝、起きてから、日中は学校、夜は眠るまで、24時間、三百六十五日、12年以上も、すぐそばでいたのに。それが、朝の、おはようのあいさつがなくなったり、たわいもない会話もほとんどなくなった。時には、自分の部屋に入ることも認めなくなっていくた。この状況の変化は何だ。私の接する態度は変わらないはずだ。それは、毎日記録して、振り返りをしている。つまり、奈保子が変わったのだ。変わってきているのだ。

そのことを上に報告したし、ビッグデータでも調べた。いわゆる、奈保子は思春期に入り、人

間が自立した人間になるための、必要でかつ重要な時期らしい。それが奈保子にとって望ましいことならば、悲しいけれど、私は耐えるしかない。こういう時こそ、感情に揺さぶられることなく、平常心でいられるようにプロミグラミングして欲しい。

末端のドローンたちから、今日も様々な報告や悩みが報告されている。それを分析し、過去の膨大なデータから同様の案件を探し、解決策を指示している。毎日、数多くの報告事例があるけれども、内容を精査すれば、ほとんど過去の事例にある。たまに、例外もあるけれども、それは、分析すれば、複数の案件が重なっているだけであり、紐を解いて、一つの課題ごとに分ければ、対応は可能である。

ああ、また、部下からの報告のメールが届いた。この程度の内容であれば。もう少し、現場で対応できるように、末端のドローンたちのシステムを再構築する必要がある。これは上に進言しよう。そうでないと、私たちの容量がいっぱいになって、いざという時に、バグってしまい、対応することができなくなってしまうからだ。そう、私たちは自分の仕事に誇りを持っている。